



広がりゆく台湾ドラマの今日

台湾映画・ドラマ研究家 稲見 公仁子

2001年の「流星花園～花より男子～（原題：流星花園）」の大ヒットで対外的に存在感を示すようになった台湾ドラマ。この10余年の歳月のなかで、台湾ドラマ業界は確実に進歩した。

以前にも、たとえば中華電視（華視）の時代劇「包青天（原題）」が大ブームとなって香港などでも持てはやされたことはあったが、それ以上の広がりを持つことはなかった。だが、「流星花園」によって生まれた偶像劇（台湾版トレンドドラマ、アイドルドラマ）のブームは違う。見事に定着し、後に影響を与えている。

台湾のドラマは、大きく3つにカテゴライズできる。まず、平日夜の20時台などをメインの放映時間帯とする帯ドラマ（20時放映のものは八點檔と呼ばれる）、次に週末金土日の夜22時台に90～120分枠で毎週連続して放映される偶像劇、そしてテレビドラマと映画の中間に位置するテレビ映画（電視電影）だ。一族の愛憎劇や時代劇を主体とする帯ドラマも根強い支持層を持っているが、対外的に産業として成立しているのは偶像劇である。

そもそも偶像劇は、従来の帯ドラマに対し、若者の好みは違うという発想から生まれた。作り手の多くは1980年代後半の日本のトレンドドラマを好んで見ていた人々だ。過去においては、日本のコミックの原作ものやその影響を受けたラブストーリー、芸能界など華やかな世界を舞台にしたもの、玉の輿ストーリーなどが多い。めぼしい作品は香港や中国はもとよりシンガポール、マレーシア、インドネシア、フィリピン、タイなどの東南アジア諸国、中華系移民が多い北米地区、そして、韓国、日本と多くの国に配給権が買われ、各地にファンを増やした。好調な海外セールスを背景に、10年で製作費は倍増。かつては富豪の御

曹司の衣装に露店の吊るしをあてがうしかなかったが、今では宣伝効果も認められて正真正銘のブランド物が提供されるようになるなど、ビジュアル的にも確実にレベルアップした。ラブストーリー一辺倒だった内容も、サスペンスや身近な社会問題を取り入れたものも出てきて、多様性を感じさせる。観光客誘致の効果もあり、地方都市も撮影には協力的。撮影に使われた施設やショップが新聞や雑誌の記事になったり、ガイドブック化されることもある。昨今は合作も活発だ。

今年は7月1日にデジタル放送への完全移行を控え、よりハイレベルなものが求められている台湾ドラマ。現状はどのようなのだろうか。

『 』 繁栄を支えた女性プロデューサーの動向

台湾偶像劇の今日の隆盛は、俳優の個性をうまく利用し、ツボを押さえたドラマづくりする女性プロデューサーによる部分が多い。代表的な人物に“偶像劇の母”と言われる柴智屏（アンジー・チャイ）がいる。柴智屏は、「流星花園」のプロデューサーとして同ドラマから誕生したスーパーアイドルグループ“F4”をバックアップした人物であり、2008年に観光局の依頼により日韓での放映を前提に企画されたドラマ「君につづく道（這裡發現愛）」のプロデューサーでもある。中国との合作や韓国の人気俳優の起用などもいち早く実践してきた。柴プロデュースの最新作は、現在、中國電視（中視）と衛視中文台で放映中の「翻糖花園（原題）」で、主演は韓国のアイドルである。（台湾では、同時期に地上波局と有線局など異なるシステムの局で同じ偶像劇を放映するケースが多々見られる）

原作のないオリジナル脚本の偶像劇で高い支持を受ける三立電視台（SET）で数多くのヒット作

を手掛けてきた、陳玉珊と蘇麗媚も注目に値する。このふたりは、2010年、SETから独立し、それぞれに製作プロダクションを設立。2011年、それぞれの第一回プロデュース作品が相次いで放映された。いずれも台湾ドラマの広がりを感じさせる側面を備えたものである。

まず、蘇麗媚の夢田文創は、4月に台湾電視(台視)と古巣SETで「最後はキミを好きになる!(酔後決定愛上你)」を、10月に華視と東森綜合チャンネルで「真心請按兩次鈴(原題)」をスタートさせた。前者は、酔った勢いで婚姻届を出してしまった男女の物語。後者は、孤児になった知人の子を育てる女性と離婚歴のある男性のラブストーリーだ。この2作品を放映するにあたり、蘇は<文創偶像劇>を提唱した。<文創>とは<文化創意>の略である。台湾のテレビ文化の産物のなかで唯一産業として成立している偶像劇を、更に発展させようということ、よりクリエイティブな現代劇を創出すると同時に、舞台劇やコミック、ゲームなどとのクロスメディアな展開を試みるつもりだ。昨年2011年12月の時報周刊(1765期)によると、「最後はキミを好きになる!」の舞台劇はこの2012年秋の上演を目指しているという。

陳玉珊の華威電視製作は、台湾ドラマ史上最高の総製作費1億2600万元(2012年3月初旬のレートで約3億5000万円)をかけた「王子様の条件(拜金女王)」を、デジタルテレビ局の壹電視をパートナーにハイビジョンで製作、壹電視と華視、超級電視台(超視)の3局で6月から放映した。1話あたりの製作費600万元(約1670万円)で、通常1話200万元(約550万円)の3倍にあたる。これほど多額の資本を投入できたのは、十数か国に対する事前の海外セールスに成功したことが大きい。億にのぼるロイヤリティを稼いだのではないかとされている。玉の輿願望の強いモデルが真実の愛に目覚める姿を追った物語で、映像の品

質向上をめざし、機材も従来のドラマとは異なるコマーシャルや映画撮影に使われる新機材を使用。「セックス・アンド・シティ」の衣装デザイナーであるパトリシア・フィールドらをスタッフに招き、本物の映像を追求した。

現代女性の生き方を映すドラマ

1%そこそこの視聴率で始まりながら、その後、社会現象を引き起こしたのは「結婚って、幸せですか(犀利人妻)」だった。SETが製作し、2010年11月から2011年4月にかけて、台視が金曜の夜に、SETが土曜の夜に放映したドラマだが、偶像劇といいながら不倫を扱ったものだった。何が話題を呼んだのか。決してベッドシーンなどではない。仲の良い夫婦を愛に飢えた従妹が引き裂く。離婚後、妻は夫を見返すべく女磨きを始め、失っていた輝きを取り戻していく、その女磨きの過程で視聴率は急上昇し、最終的には9.45%、最高瞬間視聴率12.83%を記録した。3%いけば十分ヒットといわれる多チャンネル社会であること、初期に1%を切る回もあったことを考えると奇蹟である。台湾の離婚率はアジア1と言われるほど高い。そんな現状を背景に、現代的女性のあり方を描いて支持を得たととらえるのが妥当だろう。これも仕掛け人は女性プロデューサー(王珮華)である。

偶像劇は若年層向けと定義されてはいるが、昨今は、偶像劇の時間帯に放送されることで偶像劇と呼ばれているにすぎない。かつてはメルヘンチックなラブストーリーが高視聴率を上げたが、昨今は、結婚・家庭という問題に直面し始めた20代後半から30代の独身者の共感を得るタイプのドラマが支持を受けるようになった。

2011年9~12月にかけて民視で日曜の夜に、八大電視(GTV)で土曜の夜に放映した「イタズラな恋愛白書(我可能不會愛你)」も、女性の社会進出が普通である現代の、男女の姿の一端をよく

映していた。日本以上に晩婚化の傾向がある台湾社会を背景に、15年の付き合いになる友達以上恋人未満の30歳の男女が35歳までにどちらが先に結婚するか賭けをする。互いに理解し合い、ここぞというときに救いの手を差し伸べるソウルメイトともいべき主人公たちの関係を、嫌味のないファンタジックな表現で描き支持を得た。最終回では、年齢性別視聴率で15～24歳の女性が11.59%、25～34歳の女性が13.59%という実に高い数値を記録した。

台視とSETが2011年8月末から半年間にわたって放映した「進め！キラメキ女子（小資女孩向前衝）」の支持層は、15～44歳と幅広い。デパートの営業部に所属するキャリア志向の20代半ばの女性をヒロインに、金持ちのボンボンを配したラブコメディである。経済的弱者の女性と富裕層の男性のカップリングというパターンで玉の輿願望も満たして日曜夜の視聴率競争をリードし、最終回では7.33%（15～44歳では9.25%）という高視聴率をマークした。小資女孩という単語が、台湾というより中国で使われている言葉であることから中国マーケットを意識し過ぎだと非難する論調も当初はあったが、翌月曜に向けての活力源として作品そのものが好まれたということだろう。

「結婚って、幸せですか」は、放映終了後に映画化の話が決まり、この2012年夏に劇場公開される予定だという。原作ものではないオリジナルのドラマが映画化されるのは、2009年にドラマ版が話題になり、今年1月公開の映画版が全台湾で1億2000万元の大ヒットを記録した「ブラック&ホワイト（痞子英雄）」に次いで2作目である。「イタズラな恋愛白書」についても、映画化の噂は流れているが、こちらは、実際にどうなるか現時点では不明だ。とはいえ、台湾映画が活況を呈する時代になったことで、テレビドラマも新たな可能性を持つようになったのは確かである。

国軍・警察ブームと100年

ここまでに書いてきたのは、従来の偶像劇の路線を推し進めて発展させたタイプの作品群の話だが、意外なジャンルが話題を振りまいてもいる。

一昨年2010年の7月、民間全民電視（民視）で金曜の晩に放映した「新兵日記（原題）」が大旋風を巻き起こした。このドラマは、その名の通り新兵の訓練の日々を描いたもので、国防部の全面協力の下、台中の軍事基地・成功嶺で撮影されており、兵役時代を懐かしむ成人男性層の支持も得て最高視聴率11.74%を記録。それまで大して重視されていなかった金曜夜の偶像劇の時間帯が一躍台風の目となったばかりか、続編「新兵日記之特戰英雄（原題）」も引き続き高視聴率を記録。この流れは国軍・警察ドラマブームとなり、「廉政英雄（原題）」、「真的漢子（原題）」、「勇士們（原題）」といったドラマが続げざまに製作、放映された。

このうち「勇士們」は、中華民国建国100年を記念して国防部が3000万元を出資し、SETが1500万元を負担して制作したドラマだ。2011年は、この“100年”を意識した企画もいくつか登場した。「勇士們」はその代表格で、中国大陸での抗日戦争から金門島での国共の激戦、そして現代の国軍を描いた。9～12月にかけて台視と三立で放映したが、視聴率は1%にも満たず、同じ時間帯に民視が放映した「廉政英雄」のほうが高い支持を得た。「廉政英雄」は法務部から題材の提供を受けた検事ドラマで、事件にリアリティがあり、そこが魅力になっている。

100年記念ドラマということでは、公共電視台（公視）が放映した「瑰寶1949（原題）」も特筆すべきだろう。北京から台北に渡った故宮博物院の宝物を扱い、文化的側面からこの数10年の年月を見つめた。台湾のNHKと言われる公視は、視聴率より質を重んじる局であり、台湾放送業界最大の賞・金鐘獎で5部門にノミネートされ、美術

設計賞と音響効果賞を受賞している。

“文創” に向かって克服すべきもの

ここまで読むと、現状も将来も楽観できるように思われるかもしれない。だが、問題点もある。じつをいうと、全般的には視聴率低下の傾向にある。高視聴率のドラマがある反面、昨今では1%に満たないドラマも珍しくない。従来にないタイプの新しいドラマが必ずしも大衆の支持を受けているわけではなく、「王子様の条件」や巨悪に挑むニュースキャスターを描いた台視&SETの「国民英雄-X（国民英雄）」は、ともに製作者のクリエイティブな精神を感じさせる意欲作であり、ツボを押さえたストーリー展開をしていたが、残念ながら視聴率的にはあまり振るわなかった。

合作もメリットとデメリットがせめぎ合う。昨今は、従来から見られた中国との合作のほか、壹電視が製作し中視と共同で放映した警察ドラマ「真的漢子」のようにアクションに長けた香港スタッフを招いた例や、先にあげた「翻糖花園」や民視とGTVの「ハヤテのごとく！（旋風管家）」「スキップ・ビート！（華麗的挑戦）」などのように韓国とタイアップし、主演に韓国と台湾双方の人気アイドルを起用する例も流行っている。狙いはK-POPファンと韓国マーケットだろう。

合作により資金面やキャスティング、ロケーションの選択の幅が広がるのは悪くない。だが、特に中国との合作は、インターネットでの違法配信を助長し、視聴率に悪影響を及ぼすという見解もある。中国で先行放映された場合、そこからネットに映像が流出する可能性は極めて大きい。台湾側の製作者・放映局は同時放映でリスク回避を図っているが、その策もうまく機能していないのが現実だ。実際、「晴れのちボクらは恋をする（幸福最晴天）」は、中視での放映開始は中国・安徽衛視での放映開始からわずか4日遅れだったが、安徽衛視が16日間で全話放映してしまった

ため、3週間後、台湾で第3話を放映したときには、既に最終回までがネットに流出していた。こういった例は過去にもあり、頭の痛い問題だ。

人材の流出にどう対応するかも課題である。かつて高視聴率を上げていた人気俳優がドラマから映画に比重を移す例も、拠点を中国に移す例も後を絶たない。特に、昨今は、役者として成長著しい20代後半の男性スターたちに兵役問題が重くのしかかってきており、後継スターをどうするかという問題は切実だ。映画で評価を受けた若手俳優、たとえば陳柏霖（チェン・ボーリン）や楊祐寧（トニー・ヤン）、張孝全（ジョセフ・チェン）、混血俳優のリディアン・ヴォーン、李千娜などを主演に起用する試みもなされている。

じつをいうと、流出しているのは俳優だけではない。演出家についても、ヒットメーカーたちが中国の製作会社と契約し、台湾の現場になかなか戻れない状況になっている。中国ドラマで演出家が台湾出身という例が多々出てくるというわけである。演出家の育成については、公視がテレビ映画の企画枠で学生映画を支援し、何作品も放映しているが、偶像劇・帯ドラマの即戦力というよりは、映画界へ人材を送り出す窓口というニュアンスのほうが大きいかもしれない。

違法配信や人材流出などの厳しい状況下にあっても、テレビ業界は大量のコンテンツを必要としている。テレビ局は、日本・韓国・アメリカなどからドラマやバラエティを買い付けて放映する。なかでも韓国ドラマの人気の高い。韓国ドラマは、内容や構成が台湾語チャンネルで放映される台湾語の帯ドラマに近く馴染みやすいのだという。支持層は、台湾語ドラマと同じく主婦層である。そういった背景もあってか、国産ドラマより韓国ドラマで放送枠を埋めようとするドラマ専門チャンネルもある。

2011年8月、この海外ドラマに依存する傾向に対し、國家通訊傳播委員會（NCC）は、東森・

GTV の両局に国産ドラマの放映比率を高めるよう放送内容改善の要望を出した(2011年8月3日中央通社報道ほか)。台湾ドラマ産業及び俳優の生存権を鑑み、海外ドラマの台湾文化への影響などを懸念してのことと思われる。NCCの要望を受けてか、東森は偶像劇の放映に力を入れ、GTVも製作中だったドラマの放映を開始させている。

先ほども書いたが、〈文創〉とは〈文化創意〉の略である。民主主義国家である台湾は、中華圏でもっとも自由な創作活動のできる場所だ。地デジ化を控え、新聞局はハイビジョンドラマへの製作補助金制度も創設している。2011年はそれまで自社製作をしてこなかった中天電視台も「五月に降る雪(記得、我們有約)」などドラマ製作を始め、SETもより良質な作品をと新たなシリーズ枠を複数創設した。地味ながら、感動的な実話を

もとにしたテレビ映画やミニシリーズを作り続け、金鐘獎で高く評価される大愛電視台もある。過去に、鈕承澤(ニウ・チェンザー)や周美玲(ゼロ・チョウ)、鄭有傑(チェン・ヨウチェ)ら海外にも名前を知られる映画監督による偶像劇やテレビ映画を多々製作してきた公視も、新たなシリーズ企画を打ち出してくるだろう。活況に沸く映画界とともに、テレビドラマが今後も台湾の映像文化を盛り上げていくことを信じたい。

※本文中のドラマタイトルは、邦題のあるものは初出時に邦題の後に()で原題を付記。邦題のないものは「(原題)」と付記した。

※人物名は漢字表記を基準としたが、日本国内において関連作品が放映されるなどしてカナ表記が散見される人物については、カナ表記を併記した。